桧隈寺第3次発掘調査現地説明会資料

1981年9月26日　奈良国立文化財研究所　飛鳥藤原宮跡発掘調査部　岡本東三

1．調査の経過

高市郡明日香村桧前に所在する桧隈寺は、有力渡来人集団の一つである東漢（やまとのあや）氏の氏寺として知られている。桧隈寺は高取山から北西にのびる丘陵上の先端部に位置している。丘陵の馬背を整地した平坦地には、3つの土壇と礎石の一部が残っており、現在は、東漢氏の祖とされる阿知使主（あちのおみ）を祭る於美阿志神社の境内地となっている。

当調査部では、過去2年間にわたり、飛鳥地域の寺院調査の一環として、桧隈寺跡の調査を行い、今年で第3次調査をむかえている。第1次では南門推定地を調査したが、みるべき遺構は検出されなかった。第2次調査では、従来中門と考えられてきた土壇を調査し、金堂跡であることが判明した。今回は、第3次調査として、伽藍の北側にある推定講堂跡の発掘調査を実施した。この講堂跡は、古くから、残存する13個の礎石と礎石抜取り穴から桁行7間、梁行4間の東西棟建物であることがわかっていた。今回の調査は、主として講堂中央間を含めた西半部について、約700㎡を発掘した。

2．検出遺構

発掘調査の結果、講堂とその瓦積基壇・階段・雨落ち溝などを検出するとともに、基壇上で講堂廃絶後とみられる礎石建物を検出した。

［講堂］　桁行7間、梁行4間の講堂は、桁行総長29,4m、梁行総長15,2mである。柱間寸法は基準尺30,3cmとすると、身舎（中5間分）15尺、廂11尺、梁行身舎（中2間分）が14尺、廂が11尺となる。現存する13個の礎石のうち、北側の廂柱列の東から1間目の礎石が凝灰岩製切石の組合せ石室の底石（125×90cm）を転用したものであるほかは、長大な花崗岩の自然石を用いている。なお、東北隅の礎石の中央部には、径20cm、深さ25cmの穴がうがたれている。基壇上面では礎石据付け痕跡が認められないことから、基壇築成途中に礎石を据えたのち、上面まで基壇土を積んだとみられる。なお、礎石抜取り痕跡で確認できる根石には、小型の礎石ほどある大きな石を用いているものもある。

［基壇外装］　いわゆる瓦積基壇である。その規模は東西幅35.3m、南北幅21,2m、高さ1,2mである。建物から基壇の出は10尺（約3m）となる。瓦積は基底部からじかに平積しているが、北辺の西側では、自然石を用いた地覆石の上に瓦を積んでいる。平瓦平積みを基本にしているが、一部に重弧文や扁行唐草文の軒平瓦、あるいは単弁蓮華文や複弁蓮華文の軒丸瓦を差し込んでいる。北辺が残存状態がよく、最もよいところで基底部から80cmほど残っている。西辺と南辺とは後の補修で、玉石積みに改作しているため遺存状態が悪く、西辺では基底部の5枚ほどが残り、南辺ではかろうじて1,2枚が残る程度である。後補の玉石積みは人頭大のものから幅50cm長さ70cmの扁平な石を一列に並べ、上端をそろえるため瓦を積みあげている。南辺、北辺の中央部と西辺身舎北側間に設けられた階段は、いずれも二次的なものであり、当初の瓦積基壇に伴う階段は現在のところ不明である。なお、基壇上面からは塼が出土することから塼敷であった可能性も考えられる。

雨落溝は幅20cm、深さ5cmの素掘りの溝で、基壇端から約1mのところで検出したが、東辺では確認できなかった。雨落溝の位置から推定して、この建物の軒の出は13～14尺であったと考えられる。また、北辺と西辺の基壇端と雨落溝の間で、一辺25cmほどの小さな柱穴掘形を検出した。その柱間は9尺前後で軒足場のようなものだろう。

［礎石建物］　講堂廃絶後に基壇上に建てられた礎石建物は、講堂北側廂柱列、身舎北側柱列、妻柱すなわち棟通りで4間分を確認したが、現在のところ全体の規模は不明である。桁行の柱間寸法は10尺等間で、一部は旧講堂礎石をそのままの位置で転用している。梁行の柱間寸法は北側の一間が10尺、南側の一間が15尺となる。この建物の礎石は、円形柱座の造出しをもつ礎石が3個含まれており、他の堂宇の礎石を転用したと思われる。

3．出土遺物

遺物は、莫大な量の瓦類のほか、土器や金属製品が出土している。瓦類は大半が基壇縁に崩落した状態で堆積し、瓦層となっている。軒平瓦は、重弧文、扁行唐草文（7世紀末）、東大寺式均整唐草文（8世紀中頃）、平安時代のものがあり、4型式に分かれる。軒丸瓦は単弁蓮華文（7世紀前半）、山田寺式（7世紀中頃）、複弁蓮華文（7世紀末）、平城宮式6282B・6133系（8世紀中頃）、平安時代のものなど、10型式が出土した。そのうち、出土量のもっとも多いものは、いわゆる藤原宮式に含まれる複弁蓮華文（6275-G）と扁行唐草文軒平瓦（6641-J）の組合せである。他に道具瓦として椎先瓦が3種出土している。なお、軒瓦桶巻き作りを傍証する軒隅切瓦は、造瓦技法を知るうえで注目すべき資料である。

土器は須恵器、土師器、黒色土器、白磁、青磁などが、基壇土や基壇縁瓦層、土壙などから出土した。土器の大半は基壇上から出土した小型土師器皿、瓦器（11～15世紀）である。時期的には7世紀初頭から15世紀にかけての長期間の土器が混然と出土しているが、平安時代（10世紀後半～11世紀前半）の土器がややまとまりをもっている。金属製品のほとんどは釘類であり、基壇縁瓦層からの出土である。

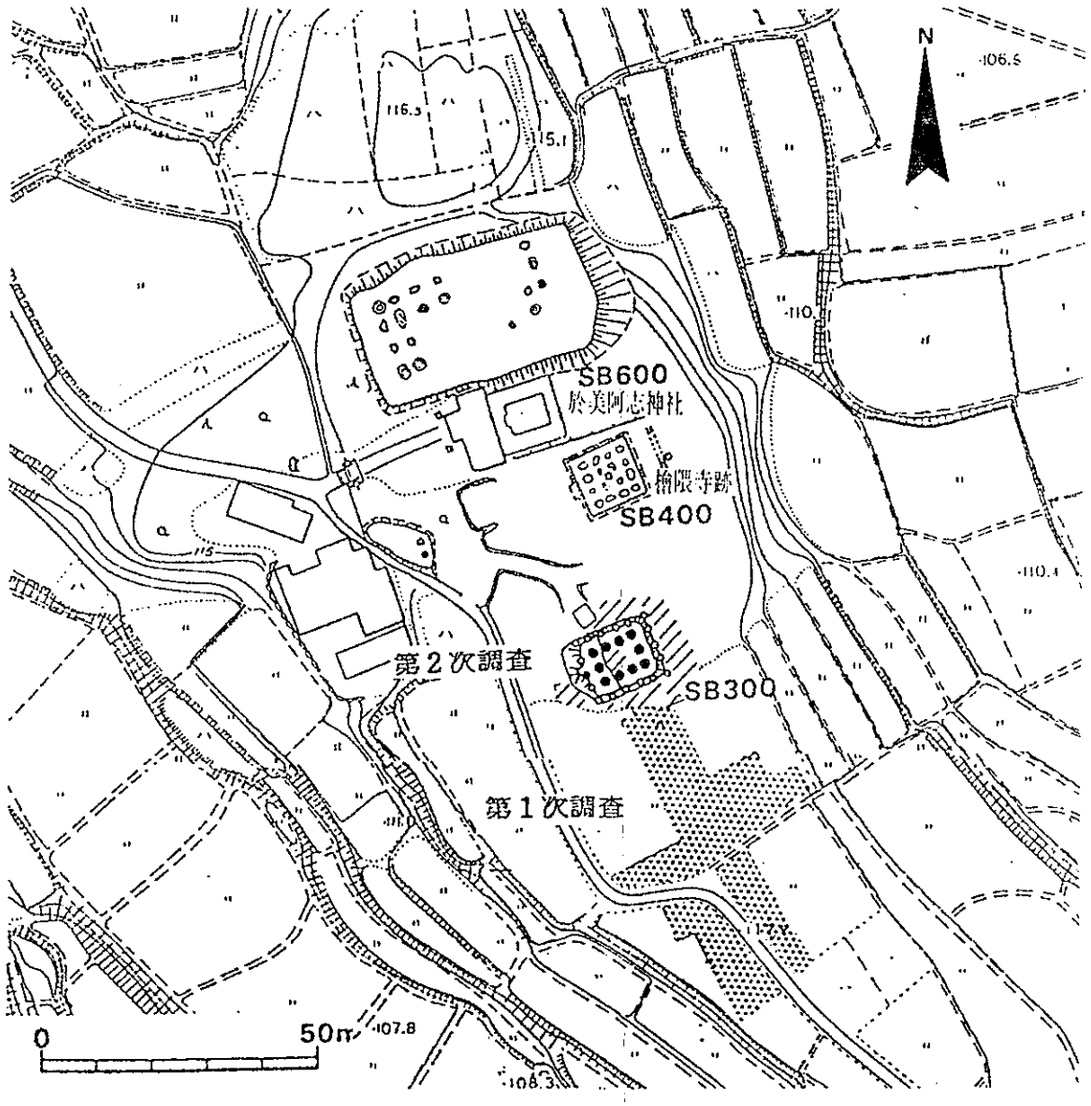
4．まとめ

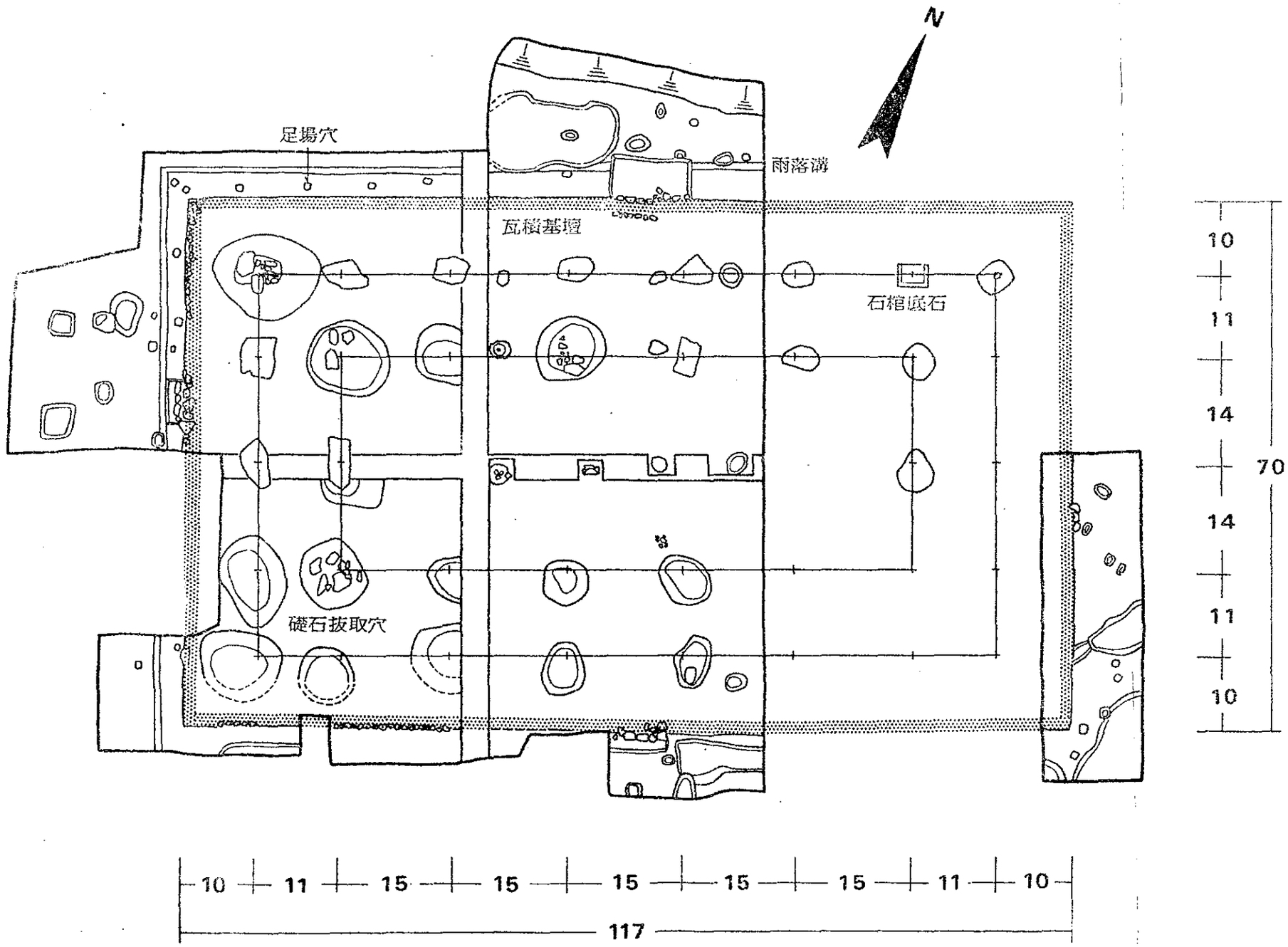
今回検出した講堂の年代は、瓦積基壇の中に含まれる軒瓦の年代から、一応7世紀末と考えられる。しかし、7世紀前半から後半にかけての軒瓦も出土することから、瓦積基壇が創建時のものかなお検当を要しよう。瓦積基壇を補修して玉石積み基壇につくりかえる時期は、後補の階段を据えた土層から出土した土器により平安時代後期（11世紀）と推定される。それは、塔跡に十三重石塔を設置した時期にほぼ合致している。講堂廃絶後の礎石建物は基壇上から出土した土器から判断して、14～15世紀の創建としておきたい。しかし、この時期に見合う瓦は出土していない。

今回出土した瓦積基壇は近江や山背、河内などの寺院でみられる工法であるが、飛鳥地方の寺院では、はじめての例である。こうした基壇外装工法が、渡来氏族との関係で導入されたとする見解もあり、今後検当しなければならない課題の一つであろう。

講堂の建物方位は金堂、塔などと同じく真北に対して23°～24°西偏する方位をもっている。これは丘陵上の制約という面もあろうが、条里制地割との関係も検討する必要があろう。講堂と金堂の心々距離は約67,8mで、講堂と金堂は建物の中軸線を共通にする。この中軸線から塔の心は東約11mに位置し、講堂基壇東端と塔基壇東端がほぼ揃うことになる。なお講堂と塔の距離は36mである。

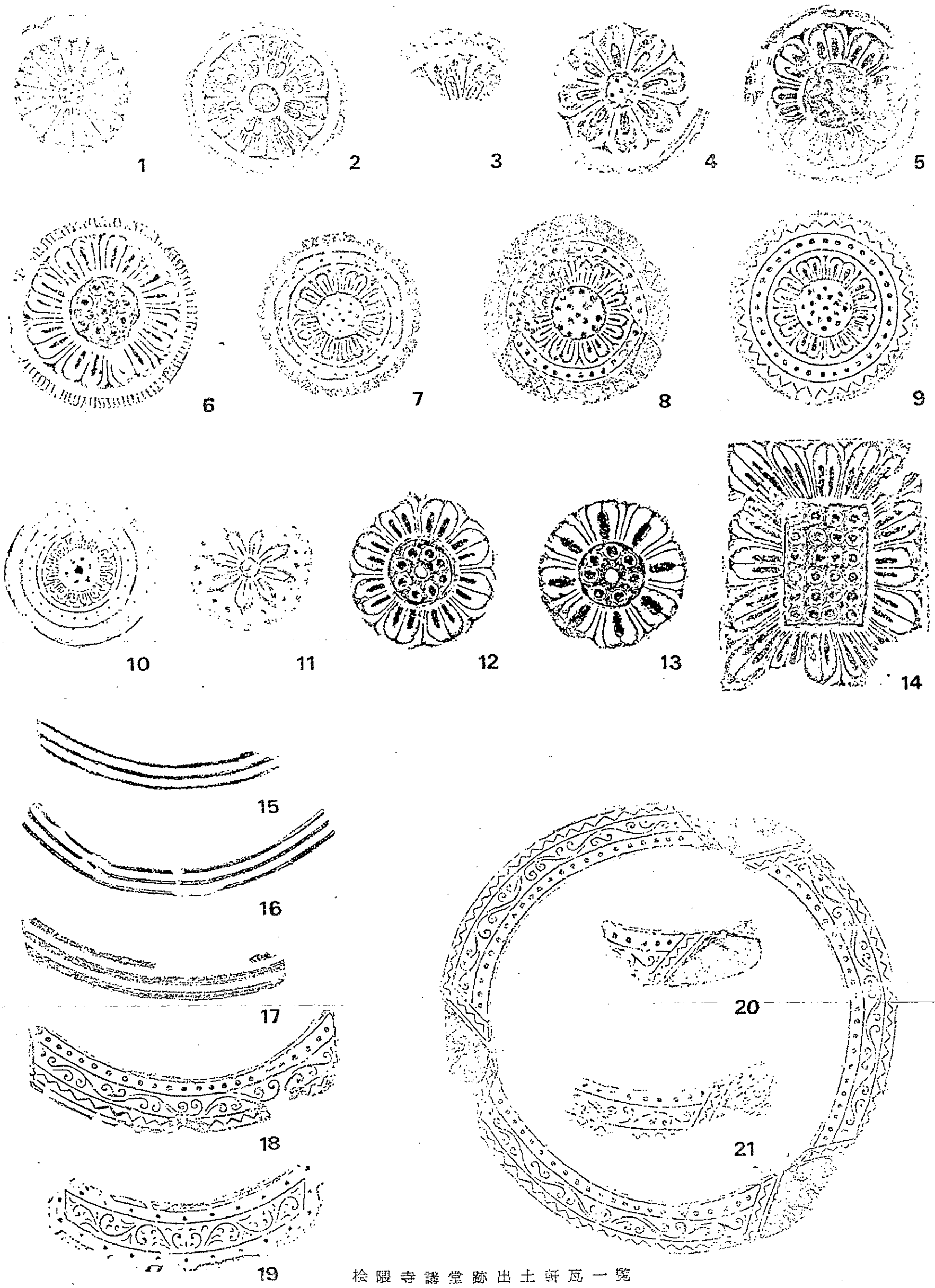
これまでの調査で、塔、金堂、講堂とその主要伽藍が明らかになったが、現段では回廊が講堂に取付かず、回廊の存否や、伽藍全体の規模や方向については、まだ未解決の点を含んでおり、今後の究明課題といえよう。





検隈寺第3次 講堂跡発掘調査遺構図 (1:200)

0 15m



桧隈寺講堂跡出土軒瓦一覧